
美食家

R-太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美食家

【Nコード】

N7869B

【作者名】

R - 太朗

【あらすじ】

誰しにも食事に関して好物の一つぐらいは持ち合わせているだろう。叶うのならば、三食すべて好物で腹を満たしてみたいと思ったことはないか。朝、昼、晩——その好物だけを食う。なんと欲に忠実な願望だろうか。そして、この願望は決して手の届か願いではないだろう。妥協さえすれば概ねこの願いは叶うはずだ。三大欲求のうちこれほど叶えやすい願いもないだろう。

（前書き）

すんげー適当にぱつと書いたから失望されるかもしれませんがね苦笑

誰しにも食事に関して好物の一つぐらいは持ち合わせているだろう。

叶うのならば、三食すべて好物で腹を満たしてみたいと思つたことはないか。

朝、昼、晩——その好物だけを食う。なんと欲に忠実な願望だろうか。そして、この願望は決して手の届か願ひではないだろう。妥協さえすれば概ねこの願ひは叶うはずだ。三大欲求のうちこれほど叶えやすい願ひもないだろう。

——しかし、これが三日と続けばどうだろう。さしもの好物といえど、飽きて見ることにすら苦渋を伴うのではないか。

三日、一週間、一月、半年、一年——果てには一生に渡り永久に続くとしたらどうだろう。

その好物に嫌悪を抱き、憎悪するのではないか。気が滅入るところの話ではない。絶望すら感じるほどの既知感に満ちた食事。

——仮に、どんな好物を口にしようと、どんな下手物を口にしようと食事をとる度、この既知感を伴う食生活しか送れない人間がいるとしたらどうだろうか。目の前に並んだ料理が昨日も食つた。三日前にも食つた。——ああ、もしかしたら自分は生涯、この料理しか口にすることがないのではないかという、否、口にできないのではないかという恐怖。

ならばどうするか、どうすれば真に充たす食事を口にできるか。腹を満たすのではない。欲を充たすのだ。

——答えは簡単だ。すべての食事に既知を感じるなら今まで口にすることがない未知の食事を口にすればいい。或いはその中に欲を充たすモノが存在するかもしれない。

ここに、男がいる。彼こそがその既知の食事に縛られた哀れな美食家^{グルメ}である。名は、そうだな――グルメ、とでも呼んでおこうか。グルメは財だけは持っていた。生まれてこの方、部屋から一步も外を出ずに世界中の料理をすべて味わうほどの莫大な財を。故に彼の舌は古今東西いかなる料理だろうが知らぬ味はない。西に珍奇な料理があると耳にすれば直ち口にし、東に大層美味な料理があると耳にすれば口にした。だが、どんな料理を咀嚼しようとグルメが充たされることはなかった。

今日もグルメの眼前にはどこから取り寄せた未知な料理が所狭しとならんでいる。グルメは今度こそはと嬉々とした表情で未知な料理を口に運ぶ。が、嬉々とした表情はそこで色褪せた。

” 嗚呼、これもか…… ”

彼はそこでフォークとナイフをテーブルに戻し、使用人に料理を下げさせる。下げられていく料理はすべて一口、口にただけ。例外はない。

だんつ、とテーブルが大きな音を立てた。やり場のなにグルメの怒りがテーブルを打ったのである。本日の料理も彼の欲を充たすには至らなかった。使用人の女はさして動揺することもなく、慇懃な動作で並べられていた料理を次々と下げていく。彼女の主がこのようないをするのは別段珍しいことではない。ただ、今日のグルメはいつにもまして消沈している様子ではあるが。

グルメは頭を抱え苦悩する。なぜ口にする料理すべてに飽きるほどの既知感を伴うのか。今日並んだ食事どれも初めて目にする料理ばかりだ。なのになぜ……！

グルメがいつにも増して落胆するのには理由があった。今日運ばれた食事で世界中にある料理全てが一通りその舌を通ってしまったのだ。これでこの世界に彼を充たす料理が存在しないことが証明されたのだ。

「——っ」

使用人の女がすべての料理を荷台に運び終えた時、女の口から苦痛の音が漏れた。最後の皿を運ぶ際、つい指を切ってしまったのだ。女の指先から赤い雫が零れ落ちる。

グルメはその様子をぼんやりと眺めていた。だが彼の双眸はこれまでにないほど爛々と輝いていた。グルメは静かに、使用人の女の下に歩みより女の傷ついた指先に舌をあてた。傷口を舐める、という行為はさほど珍しいことではない。ただ、それが主と使用人という立場でなければ。

滅多に同様な使用人の顔に憔悴の色が浮かぶ。女が知る主は決してこのようなことをする人物ではない。その主が貪るように自分の指を舐めているのだ。——血の気が引いた。微々たる出血によるものではない。主に行為に対してである。女は自分の立場忘れ主をふき払う。けれど女の細腕ではグルメと女の距離を遠のけることはできなかった。一息の間につめれる距離でしかない。

強引に弾かれたグルメの視線は呆然と宙を彷徨っていた。使用人の意に反した行動にではない。ただ、今に口にしたモノが自己を見失うほど美味しかったという事に対してだ。舌先に残ったかすかな味を味わうように何度も何度も口の中で舌を弄ぶ。グルメは舌先に残った味が完全に消失するとグルリと女に向き直った。グルメの思考を占めていたものは美味という言葉だけだった。今まで口にしたどんな料理よりもそれは美味だった。

グルメは古今東西あらゆる料理を口にした、だが、彼を充たすモノは存在しなかった。今日の前にある食物以外は——

…… F i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7869b/>

美食家

2010年12月10日14時43分発行